例えばこんなミノさん

ブロx

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もしも、その時ミノさんに不思議な事が起こったら。

目　次

例えばこんなミノさん ―――― 1

例えばこんなミノさん

―三ノ輪銀は勇者と呼ばれる―

『ねぅ…あゃ～～』

『？　おやおや？もう言葉をしゃべれるようになったのかい？マイリトルブラザー』

今はまだ赤ん坊の我が弟。

この弟が成長したら舎弟にしてこき使うアタシの夢は、順調に進んでいる。

弟をあやす為に昔の映画を見ているアタシ達。

食い入るように映像を見ている弟は、控えめに言って可愛さが神がかってる。

『Ｙｏｕ　ｏｎｌｙ　ｓｅｅ　ｈｉｍ　ｗｈｅｎ　ｙｏｕ　ａｒｅ　ｖｅｒｙ　ｙｏｕｎｇ～～』

あなたに訪れる。

『ふしぎな出会い～～』

笑いながらアタシの指を握る、小さな弟の手のひら。

ふと思う時がある。

私は明日も、生きてここに戻ってこれるだろうか。
『あんたの姉ちゃん！　三ノ輪銀さんがしっかり！守ってやるよ～!!』
『たよ～～』
この子の為なら。
勇気１００パーセント！ってね。

「――だから。　化け物には分からないだろう」
斧を敵に向けて振り続ける自分。
生きて帰るというアタシの言葉は意味を変えて。
もしかしたら明日死ぬかもという、昨日の真実は今日の嘘になる。
「――この力」
ただ彷徨い、流されてゆく。　血潮が流れてゆく。
「――これこそが」
アタシ達矮小な人間の覚悟？　どうぞ嗤えばいい。
「そう、これこそが――」
驕りたかぶればいい。
「……ッ人間様の、」

限界を超えて、この道を往く。
ただただ往く。
「気合と、」
赤化する我が王道。
「根性と、」
断崖まで往くアタシの、
「――――魂ってやつよッッ!!!」

◇

・・・・なんだか不思議だ。
もう、あの二人には会えないか。弟にも会えないか。
この身、この魂。
震えて、マグマのように噴き出して爆発しているというのに、思考はやけに綺麗だ。
――――あちゃ～・・・・・。ちょっと血を流しすぎちゃったかな。
小学生のアタシでも、血を流しすぎたら死ぬ事ぐらい知っている。
そしてアタシは勇者だ。

勇者とは、戦い戦い戦い勝つ、勇気ある者。恐怖を我が物とする人間の事。
現在の自分の状態は常に分かっているのさ。
――死ぬね、これ。
アタシの気合と根性と魂。
このままいけば、バーテックスどもの撃退だけは何とか出来るかもしれない。
伊達に何度も修羅場は潜っていないし、現在進行形で今鉄火場に身を置いている。
・・・自分を客観視すると、なんとまあズタボロだこと。
『私達はみな運命に選ばれた兵士』とは、誰が言った言葉だったか。
――でもアタシはこんな奴らの為に、大切な人の涙は見たくない。
皆に笑顔でいてほしい。
「……だから見ててくれ」
三ノ輪銀。　一世一代の晴れ舞台。
「さあッ！ここがアタシの大見せ場！」
バーテックスを撃退し、友達を助ける我が王道。
「遠からん者は音に聞け！　近くば寄って目にも見よ!!」
目指すは『皆』助かって、天下無敵のハッピーエンド。
「これが三ノ輪家長女！『皆』を守る、三ノ輪銀の実力だ――ッッ!!」

・・・後は頼んだよ。
須美。
園子。

アタシの『親友』。

◇

「銀…？」
「ミノさん……？」
幾度もバーテックスを退けた彼女らは、百人が百人見て、正しく勇者であった。
三人の勇者達は其の地で一堂に会する。
・・・視線の先は。
『――――やった。　やったぞ、二人とも』
赤い背中。
誰かを、皆を守り抜いた意地と誇りの詰まった、小さな背中。
「ねえ。……銀。　そんな血を流して、病院に行かなきゃダメじゃない」

「…そうだよ、ミノさん。お土産だって弟君に渡さなくちゃ。
早く身体を治して、また一緒に遊ぼうよ。……私まだ、お料理教わって、ないよ」
『――――アタシが追い散らかしたんだぜ。あのバーテックス共を、三体もだ』
「……何で」
『――――もうこの銀さんは正しく凄まじき戦士ッ！　敬ったって、いいんだぜ？』
「何で振り向いて、くれないのよぉ……ッ！」

――――伝承によれば。
其の地にはたった独りだけで戦い続け、我らが天敵を退けた小さき勇者がいたという。
年齢、１１歳。　当時小学生だったその者は、腕が千切れても身体中から紅蓮の血を噴出しても、
己が武器を振るいに振るい続けた。
彼女が手に持つ武器、二振りのその斧を自分の意思で手放す事はついに無く。
天敵を敗走せしめた後も、その逃亡先を睨み続けていたという。
・・・もう二度と来るなと。　もし来たならば、今度こそはこの手で滅してやるぞと。
その勇者を知る者達は、彼女は花のような女性だったと後世まで伝えた。

薄燈色の花弁のような美しい人。
いつも私達と一緒に笑って歩んでいた、強くて勇ましい人。
――真の勇者とは誰かと問われたなら。
彼女こそが、そう。
絶えて物言う事も無い、彼女こそが真の。

――勇者である。

◇

『・・・真の勇者、か。　良いもんだねその称号』
――死んだ後って色々なモノが見えてくるもんなんだなあ。
若い身空でその生涯を閉じた、アタシこと三ノ輪銀。
その後の世界は、須美と園子は、一体どうなったのだろう？

この真暗の空間は、それをアタシに見せてくれた。
『まあ、両親も弟も助かったし無事に大往生を遂げた。
須美も園子も神樹様のお陰で、無事青春を謳歌出来た。そして大往生。　いや～万々歳だわ～！』
これもこの銀さんの勇者パウワー！　シルバースピリッツのなせる業ってもんよ。
『・・・・さて』
光が見えてくる。
心が、魂がその正体を理解する。
『はいはい、お迎えですね。　今向かいますよっと』
見渡しても見下ろしても、自分の身体はおろか物体すら見えない。
でもあの光に向かって進めという事だけは何故か分かる。
あれはゴールだ。　銀色に光る、アタシのゴールだ。
『園子や須美、後輩達の人生も見れたし、未練も無いし』
可愛いアタシの弟の、その後も見れたし。
『化けて出る趣味も無いし。　・・・さあ、いきますか』
足を動かすイメージ。それだけでアタシは光に近づく。
辛くも後悔も無い。欲も無い。寂しくも無い。

音も途絶えたこの中で、無い足を動かす。
勇気一つをともにして。
『、――。――？』
無い筈の足を、動かす。
『――』
動かす。
『――、』
うごかない。
『――え、なに？』
足が。
「……ねぅ」
記憶の彼方？　いや、忘れるわけが無かった。
何度も何度もあやしたんだから。　この手で抱っこだってしたんだから。
足を掴んでる、この小さな身体を。
「ねーちゃ！」
――、
――何、やってんだか。　赤ん坊は誰かが見てなきゃ、駄目でしょうが。

『・・・こんな所まで、ついて来て、』
そんな目しちゃって。
下の子は、上が見てなくちゃ、
「駄目でしょうが――――！」
笑う弟。可愛いは正義。　子どもは七つまでは、神の子だ。

◇

その時の事を、鷲尾須美と乃木園子は生涯忘れなかったと伝えられている。
涙で滲む視界の中で、振り向く身体。
浮かべる、ぎこちないが天下無敵のその笑顔。
「……え～っと」
ひっこむ悲しみ。
「何て言ったらいいのか……」
握られる、二人分の拳。

「…あ！　その時、不思議な事が起こった。　これだッ!!!」
「心配させるなこの、親友――――ッ!!!!!」

勇者とは、どこかで誰かがそう呼ぶから勇者というらしい。
瞳を閉じても。　開いていても。
――――四国はこの勇者三ノ輪銀と！鷲尾須美と乃木園子が守る!!
ささやく風の中。
茜空が、彼女達三人を照らしていた。